授業科目　発達障害児の医療

特別支援教育講座　長尾秀夫

授業形態と規模

授業形態は講義形式である．講義は大学院生が主な対象の授業で，その他は聴講生が受講した．

講義の目的は脳の構造と機能，LD・ADHD・高機能　自閉症に関する最近の知見，薬物療法とその効果について，医学的，神経心理学的見地から解説した．さらに受講生たちが経験した発達障害児に関する疑問を出してもらって，医学的解釈を行った．最後に医療と教育の連携についても受講生の例や自験を基に説明をした．

到達目標は，脳の構造と機能を理解して具体的に述べることができること，人間を原子のレベルから動物としての人まで組み立て，社会的存在としての人間を説明できること，LD・ADHD・高機能自閉症等の発達障害の診断基準を基に，発達障害の判断の目安を具体的に説明できること，発達障害児の支援のあり方を医療と教育の連携の下で説明できること，などである．

1．大学院生の受講姿勢

大学院生たちは分担された資料を熟読して，インターネットや文献・参考書も調べて資料を作成して，発表を行った．さらに発表では数人のグループでポスターを作ったり，劇を演じたりと工夫して発表した．毎回の発表資料は大学院生が自発的に作成・印刷し,授業の進行に協力的であった．ただ,各自の分担領域以外は内容の特殊性もあり，質問できるほどの理解が進んでいなかったため，積極的な質問がなかった．

2．教員の授業運営

大学院生たちの興味関心，体験を踏まえて講義を展開したつもりであるが，各自の分担以外については積極的な参加が得られたとはいえない．大学院生たちが発問しやすい内容と雰囲気作りが課題である．今年度は大学院生が学習のまとめを毎回どれ位しているのか，最終試験の前にどれだけ勉強しているのかを知るために，ノートに授業毎にまとめを書くこと，最終試験に際して学習の努力をノートで評価することを伝えた．

3．大学院生の中間授業評価

共通教育のアンケートを用いた．時間外学習は3.1で大学の授業としてはめずらしい高得点であった．質問や意見発表の機会も3.4で高い評価であった．その他の教員の話し方・説明の仕方について，教材等の使い方は効果的か，授業の進度および時間配分は適切か，授業内容・レベルは適切かの設問には3.0の評価があった．これらの結果からは，おおむね適切な授業となっていると思われる．

4．授業コンサルティングから

中間授業評価の後で授業改善のために教育企画室の佐藤教員に授業コンサルティング30分をお願いした．

その結果，教育方法では，授業の資料を事前に配布したこと，グループでの調べ学習を取り入れたこと，それぞれの発表に説明を加えたことは適当な方法と評価されていた．情報が多くて整理する時間が少ないこと，宿題も何をどこまですればいいのかはっきりしないことの指摘があった．ノートの書き方でまとめを書く方法を指定したことは，大学院生には行き過ぎとの意見があった．

授業内容については，グループ学習でお互いに話し合って深く考えることができたこと，小児科医という医療関係者の立場からの意見が聞けたことが良かった．しかし，説明に専門的用語が多く，時には説明が短くなり，もっとわかりやすい説明が欲しいとの指摘があった．また，講義の内容が専門的で，到達目標がはっきりしないことがあったので，どこまでが重要かをはっきりして欲しいとの希望があった．

教員の熱意については，質問や疑問には丁寧に答え，専門的なことを噛み砕いて説明していた，また分からないことはありのままに述べていたと評価されていた．

教員の発言は，時々あわただしく早口になるときがあり，時間配分に無理なときがあったとの意見もあった．

以上の大学院生の声を基に佐藤教員と話し合いを約60分持った．その中で，佐藤教員から8割以

上の大学院生が良い評価をしていた．あえて言えば，専門的な内容が多い授業なので，もう少し分かりやすくする工夫が必要であるとの助言があった．このことは私自身がずっと思っていることで，自分の悩みでもあることを伝えた．そして，私なりに考えていることとして，到達目標のレベルを少し下げて，授業内容を2割減くらいにしてみることも考えている．しかし，そうすると十分に学ぶ力のある大学院生には物足りない内容となるのではないかと考えて，決断できずに今日に至っていることを話した．私は大学生，いわんや大学院生は積極的に自己学習するのを応援するような授業にしたいと考えていることでレベルが下げられずにいると話した．

しかし，調達目標のレベルは私が設定しているものなので，すべての大学院生が高いレベルの知識を身につけなければならないのではないとも話した．すべての学生に対応することはできないが，多くの大学院生が自分に合った学習レベルを設定して，それぞれが満足できる到達度に達するためには，学習内容に基礎的レベル，発展的レベル1，高度の発展的レベルの3段階のレベルをつけることもできるが，この方法は大学院生に不快感を与えないか心配していると話した．この提案をうけて，佐藤教員が大学院生自身が自分でどこまで学習するかを決めるのであれば，学習レベルを示すことはいいことであると賛成した．

以上の話し合いの結果を，次の授業で報告し，授業内容に3つのレベルの星印をつけることを説明し，今までの学習部分についても基礎的レベルを中心に星をつけていった．

6．その後の大学院生の受講姿勢

大学院生は授業内容のレベルを示す星印に注目し，星印を伝えるときには緊張感を持って書き込んでいた．また授業のまとめも継続して書いていた．

授業の内容が，神経系の構造と機能，各自の対象事例の診断・評価の話となり，理解が進みにくい様子であった．

7．その後の教員の授業運営

授業内容の基礎的レベルの3星は忘れずにつけた．しかし，それ以上のレベルの星は大学院生の理解を見ながらつけたので，必ずしもつけない日もあった．受講している大学院生全員に確実な理解を促すために，途中で小テストをしながら進めたが，彼らの理解がコピー・アンド・ペーストから抜け出せていなかった．それを繰り返し説明するために，時間がなくなり，早口になり，時間が足りなくなる傾向があった．特に最後に全員の大学院生にそれぞれの対象児について診断をつける練習をした．一部の大学院生については発表してもらって解説をすることができたが，多くの大学院生はレポート提出で終わった．

8．大学院生の最終授業評価

中間時点と最終時点の評価の変化を見ると，全体としては90%が改善していたが，著しい改善は10%，あまり改善していない7%があった．内訳では，授業内容・レベルは80%から90%に上昇していた．教材については変化がなかった．話し方・説明，進度・時間配分は88%から70－60%に低下していた．多分これは最終の2回の授業で急いだことが影響していると考える．

9．授業コンサルティングから

「中間評価後に授業改善がありましたか?特に重要度を星で表すことはどうでしたか?」の質問には，大部分の大学院生が学習内容の重み付けができて良かったと述べていた．「これによって学習態度が変わりましたか?」の質問には，学習のポイントが分かってきたので勉強をがんばる気になったとの意見が多かった．初めに心配していた，不快感の表現はなかった．

「さらに学習意欲を高めるために教員がすべきことは何ですか?」との質問には，小テストは学習の確認であればもっと素直な問題を出して欲しいとの意見が多く，またノートも大学院生であれば評価対象に入れなくていいのではないかとの意見があった．

10．受講環境，施設・設備

講義室の大きさは適当であった．ただ，受講する大学院生の座席配置は非常にアンバランスで，教員を養成する立場からは，彼らが自発的に適切な学習環境を作るよう指導の必要を感じた．

教室の大きさからは机の数が多くて，机間巡視には狭いので，私の授業では1列分の机を片付けると，適当な空間であった．

パワーポインター，スライド・スクリーンのボックスの鍵，延長コードを事務室，パソコンを研究室からその都度持参しなければならないのは手間であった．